

法然上人『往生要集』四積書の研究

林 田 康 順

一 はじめに―問題の所在

近時、法然上人（以下、祖師の尊称略）の思想研究にはめざましいものがあるが、そうした諸研究によって漸次明らかになったこととして、真跡の少ない法然の著作・法語の解明には、法然自身の思想変遷を踏まえつつ、後世の加筆をも念頭に置かねばならないということである。そこで本拙稿では、その出発点ともいえるべき法然の思想変遷の最初期、つまり

「浅劣念仏期」、「要集浄土教時代」に位置づけられている『往生要集』（以下、『要集』）に関する四つの積書、すなわち、

1、『往生要集料簡』（以下、『料簡』）

2、『往生要集略料簡』（以下、『略料簡』）

3、『往生要集釈』（以下、『釈』）

4、『往生要集詮要』（以下、『詮要』）

について、先学の研究を踏まえ、さらに書誌的、思想的見地からその問題点を指摘し、四書の成立前後などについて検

討したい。管見では、すでにその成立前後に関して、阿川貫達氏、八木晃恵氏、坪井俊映氏、末木文美士氏、服部正穂氏等が論究されている。この中、特に末木・服部氏は、八木氏等の説に対して、四積書の成立時期を、『詮要』→『料簡』・『略料簡』→『釈』と推移するとされ、傾聴すべき論考である。

しかし、その論理展開に若干の疑問が感じられる。その理由は、四積書を一見すれば明白のように、同様の説示が繰り返し述べられるなどの繁雑さに由来する。そして、そうした繁雑さは、書誌学的研究によって明らかにされてきた法然の著作を取り扱うことへの慎重さを逆に促すものではなからうか。つまり、古本といわれる『漢語灯録』や金沢文庫所蔵の諸本に、新層と古層の存在、後世の編集などが指摘されている現状を鑑みるに、そこに含まれる四積書を取り上げる際にも、そうした慎重さが要求されると考えられる。そこで本拙稿では、原則的には四積書の言辞をすべて法然撰と受けとめた上で、後世にその増補作業を行ったのではないかと指摘

したい。つまり、同一の書物の中で相矛盾する教説が混在し、かつ、それが文章の一連の流れの中で不明瞭な形で続く場合には、その箇所を慎重に検討することは必要であり、その結果、法然の他の書物に見られる明快な論理展開が、よりスムーズな形で顕在される場合には、むしろそうした作業を行わないことは法然の意を損うことにも繋がりにかねないと思われるからである。

二 『釈』・『詮要』における惣結要行釈の位置

『要集』四釈書において、その構成中、最も疑問に思うのが、『釈』と『詮要』における『要集』第五助念方法門の第七惣結要行についての釈の位置である。惣結要行釈とは、『要集』の「大菩提心護^ト三業^ニ深信^{シテ}至^ニ誠常念^ニ仏隨^ヒ願決定^{シテ}生^{セン}極樂^ニ」とある文を、法然独自の視点から作願門（大菩提心）・止惡（護三業）・深信（深信）・至誠心（至誠）・無間修（常）・称名念仏（念仏）・廻向發願心（隨願）の七法にあてはめていくものである。四釈書では、この惣結要行釈にA釈とB釈という二種類の釈がなされている。多少の文言の出入はあるものの、A釈は『略料簡』と『釈』の前半に使われ、B釈は『料簡』と『釈』の後半、『詮要』で説かれている。そして、法然は、惣結要行の要・取なることをB釈中において指摘している。A・B両釈を比較すると、①A釈では問答を一つ、

B釈では問答を2つ引用する。②B釈では、五念門の作願門に事と理を分け、事の菩提心を取り、あるいは、止惡修善を細かく分けるのに対し、A釈ではそうした細分はない。③七法をめぐって『要集』や善導の正意か、非正意かの相違がある。④B釈よりもA釈の方が簡潔である、などの相違があげられるが、七法についての大きな隔たりはない。このA・B両釈ある中、筆者は『釈』・『詮要』におけるB釈が後人の加筆によると考える。法然の遺文を書写、編集した者が、A釈とB釈との両者があるのを見て、法然が惣結要行を重視し、詳説するB釈中の説示から、『要集』に関する釈書にこの箇所を欠くのは不都合と考え、『釈』ではA釈終了後に、『詮要』では全文の後に加筆したのではないかと想定する。

『釈』におけるB釈は、A釈の結語があるにもかかわらず、唐突にB釈が続くという形式的面、A釈とB釈という同内容のものを何故再説しなければならないのか、また同時に、一書の中にもかかわらずA・B両釈で惣結要行が、正意か非正意かをめぐって『要集』への解釈の矛盾が露呈してしまう、という内容的面の疑問がありB釈を後の加筆と考える。

また『詮要』におけるB釈は、一部を終えていると思える直後にB釈が続くという形式的面、惣結要行が入る助念方法門を正修念仏を助成する立場に抑えているなどといった『詮要』の内容に対し、B釈では、惣結要行が要・取とされると

いった内容的面の疑問がありB積を後の加筆と考える。

三 『釈』・『詮要』の成立前後

1、『釈』の位置

それでは、そうした指摘によっていかなることが明らかになるのであろうか。まず『釈』においては、かつて末木・服部氏が指摘した以外にも次のような三点が挙げられる。①『釈』が、大意・釈名・入門解釈、広・略・要というようにスムーズな形で構成されることが明瞭になる。②七法が『要集』の正意ではないとする解釈が明らかにになる。③『要集』惣結要行の間の文中にあり、『料簡』・『略料簡』にも引用のある「況復具^{スルヲ}余諸妙行^{スルヲ}」といった部分を引用しない。『料簡』・『略料簡』では、念仏やそれを助ける七法は要であるけれども、他の妙なる諸行を具すことをも認めていたのに対し、『釈』ではそうした諸行を少なくとも勧めはしない方向に向かっていたと考えられる。

2、『詮要』の位置と「選択」思想の萌芽

『詮要』においてはどうかだろうか。筆者は、末木・服部氏が『詮要』を四積書中最初期の成立と主張されたのに反し、『詮要』を四積書中、後期の成立であり、同時に、そこに「選択」思想の萌芽が察せられると考える。その理由として次に述べる諸点が挙げられる。

①『詮要』の構成として、『要集』をへ念仏往生門↓正修念仏門↓観察門↓称名念仏・引摂想と解し、これまでの三書で重視し往生の要・取としてきた七法を説く助念方法門や菩提心を説く作願門を取らず、構造的・立体的に称名念仏一行へと向かう。

②『釈』の五門分別では『要集』の正修念仏門、往生諸行門をそのまま用いているのに対し、『詮要』では念仏往生門諸行往生門と規定する。『詮要』におけるこうした用法は、『無量寿経釈』・『逆修説法』・『選択集』に受け継がれていく。③他の三書では、帰命想・引摂想・往生想を並列に説いているのに対し、『詮要』では、引摂想を要なるものとしている。引摂想は他の二想に比して、阿弥陀仏からの働きかけに重きがおかれている点に注目せねばならない。

④法然は、『要集』に説かれる助成の語を独自に転用し、助念方法門・別時念仏門・念仏利益門・念仏証拠門などの箇所を助成とした。こうした用法は、『無量寿経釈』・『選択集』などへと受け継がれていく。

⑤『要集』往生階位を釈す箇所の特異性が挙げられる。『詮要』は、他の三積書と異なり、次のAからEのような独自の視点から構成されている。

A、『要集』にある道綽の言葉を取って引用せず、善導の言葉のみを引用し、続けて『群疑論』を引用する。B、法然

自身で、『要集』の「如上」とは五念門・三心・長時等の四修を指すと再説する。C、『往生礼讃』の序文を五念門・三心・長時修が明らかにするような形で引用する。D、Aとは異なる『群疑論』の箇所を法然自身の視点から専修・雑修が明らかになるように引用する。E、雑修雑行を嫌って、専修へ向かわせる私釈を施す。

こうした法然の独自の作業に対し、末木・服部氏は、『詮要』は初期のもので善導・懷感から道綽・善導へと移行していくと指摘しているが、筆者は『詮要』における他の三釈書とは異なるこうした説示を、次のような理由で他の三釈書よりも後のものと考えたい。

イ、『群疑論』を一箇所引用するのは、両者に「引^リ善導和尚前文」とあることから懷感その人を重視するものではなく、善導を顕彰することが本義であった。また、この『群疑論』の引用箇所は、『無量寿経釈』において善導義補助の七師として引用している箇所と同一であり、『往生礼讃』の箇所は、『選択集』などに引用する箇所と同一である。法然はこうした説示を自身で求め、味読をして引用している。そして、こうした流れは、『選択集』に説く「偏依善導一師」に収斂していく。ロ、『詮要』に記載のある専修二修・雑修雑行・専修の語は、『詮要』のみに引かれる『群疑論』の語句をもって表した。そして専修二修などの語は、『無量寿経

釈』、『選択集』などへと受け継がれていく。ハ、『群疑論』の「難^ニ其行墜^ニ於憊慢之邦^ニ」という強く雑修を否定する説示を受けて「嫌^ニ雑修雑行」という私釈を施す。法然は専修・雑修を明らかにするために、敢えて厳しい箇所を引用し、同時に憊慢国に「墜」ちてしまうという理由で雑修雑行を「嫌」うのだという凡夫往生の視点から見た諸行の積極的廃捨を行う。筆者はこうした表現に選択本願念仏説に通じるものを見いだす。もちろん「選択」思想の根拠は、阿弥陀仏の本願に基づき念仏と諸行との取捨であって、四釈書執筆の時点では、後に開顕される「選択」思想までは至っていない。しかし、四釈書を通じて阿弥陀仏の意志に基準をおこうとする努力がなされ、そうした営為のなかで、諸行である雑修雑行を「嫌」うという表現をされるまでに、法然の専修念仏思想は構築されていたと考えられる。同時に、通仏教の正統をゆく『要集』の文言から離れ、直接、善導の言葉を求め、引用する姿勢に注意を向ける必要がある。

以上のような理由で、『詮要』が四釈書のなかでは後期の作であり、そこに「選択」思想の萌芽が見いだせると考える。

（紙面の都合上、詳細な検討は別稿に譲り、末註は略す。）

＜キーワード＞ 法然、『往生要集』、『往生要集詮要』、『往生要集釈』（大正大学総合仏教研究所研究員・浄土宗総合研究所研究員）